



NPO
法人

日本高山植物保護協会

JAFPA

2012.1.1 No.67

- 新年への抱負 新しい出発
- 第3回南アルプス100人会議に思う
- 伊那市のニホンジカに対する取組み
- 支部の活動報告
 - 静岡支部
 - 関西支部
 - 昭和大学北岳診療部支部
 - 伊那谷支部
- 平成23年度高山植物観察山行を実施
- 会員からの便り
 - 静岡新聞（特集）掲載紙面
- 高山植物保護キャンペーンを実施



御庵沢上流（南アルプス市）にて 提供：宮田義之氏

新年への抱負 新しい出発

会長 白旗 史朗

日本高山植物保護協会会員の皆さま、明けましておめでとうございます。

NPO 法人日本高山植物保護協会が、南アルプスの麓で孤々の声を挙げて、早くも23年の歳月が経過しました。世界に一属一種、それも日本南アルプスの一角に細々と生き永らえてきたキタダケソウ、この世にも稀な種は、これまでよくぞ永らえたものと、私たちに感嘆の声を思わず挙げさせたほど稀有な生を送ってきたといえます。これはまた、その当時まで、北アルプスや他の山地のように入山も容易でなく、登山道や山小屋の状態も比較にならぬくらい整備されていなかったことが幸いしたのだと思います。しかし、昭和三十年後半からの第一次登山ブーム、そして、徐々にこの山地へも人の開発の手がのび、それにつれて人びとの訪れが繁くなると共に、南アルプスもおのずと荒廃の度が進んできました。実のところ、私が南アルプスに入り始めたのは、昭和二十年代でしたが、突きつめて考えると、私とその荒廃の先便をつけたのだともいえ、時折り慙愧の念に駆られることがあります。

しかし、誓ノ河原に石を積むような果てしない繰り返しを続けていた高山植物保護活動も、関係者各位のたゆみない努力と環境省地元職員の方々との協力で、かすかながら光明が見えてきた様な気がします。

ですが、好事魔多しのことわざ通り、近年はニホンジカの異常繁殖による食害が南アルプスのみならず、日本全国の山にひろがってきて私達を悩ませて居ります。

その対策として、当協会は日本オオカミ協会と提携して、その導入に努力しております。オオカミというと、人はいわれのない恐怖と危惧を抱いて、ただ反対に走ります。そもそも日本の野生界に於ける植物連鎖の最高峰に位置するオオカミを絶滅させた明治政府時代に始まった政策が、この現在の未曾有ともいえる野生生物界の混乱を招いたのであり、同様の政策でその誤りに気付いたアメリカ、カナダやドイツ、フランスなどのヨーロッパ諸国は率先してオオカミを再導入し、着々とそれを成功に導いています。

私達も出来得る限り早急に、オオカミ再導入を図り、日本の自然界を昔日のように正常な姿に戻したいと決意しました。

どうか、会員の皆様も等しくご賛同頂き、一日も早い自然の復元に力を併せて進もうではありませんか。何卒宜しくお願い申し上げます。



第3回南アルプス1000人会議に思う

…次回は全国鹿サミット開催を提案…

静岡支部事務局長 望月 照夫

「第3回南アルプス1000人会議」が10月1日、2日の2日間、静岡市井川榎島(通称「さわらじま」)において開催された。

会議の出席者は51名で、過去2回に比べると少数精鋭だ。初日はシンポジウム。今回は長野県伊那市農林部幹部職員も参加された。その報告によると、伊那市の主な管轄山域は仙丈ヶ岳だが、高山植物の鹿食害はすさまじく、頂上から少し下った藪沢ロッジ周辺では壊滅状態だという。30年以上も前のことになるが、私もロッジ周りや藪沢両岸に、ミヤマハナシノブ、



会議の状況

ツリガネニンジンの青いお花が、ホソバトリカブトの花に混じって広範囲に咲き乱れる素晴らしさに、何とこは青系統の花が多いんだらう、それにしても凄い群生だ、と見とれたことを思い出す。そんな光景は今は見られない。

市では残った高山植物保護のため、防鹿柵を敷設したが、積雪期は柵が雪崩被害にあわないよう解体しているとのこと。暖国静岡県は積雪は少ないので光岳、茶臼岳、聖岳いずれの防鹿柵も通年設置であるが、降雪量の多い仙丈ヶ岳ではそれではすまないのである。余分な経費と手間がかかるのだ。

続いて、昨年の第2回目に続き日本狼協会から狼放獣の提案があった。昨年も感じたが大胆な提案である。広い土地を有するアメリカなどでは実際にやっていると聞いているが、国土が狭く人間と野生動物がニアミスを繰り返す我が国では非常に難しい話であろう。しかし、一つの試案としてその可否を議論することはとても意義深い。鹿食

害防止のための意見であり今後とも様々な角度から議論が必要であろう。

また、出席者から丹沢の鹿が増えて林床の鈴竹が食べ尽くされ、樹皮被害の樹木が枯死している旨の現状報告があった。及び山蛭も増え、山に入った猫などの家畜が里や家に持ち帰って困るなども報告があった。蛭と鹿の関係は不明であるが、鹿増加に呼応して蛭が増えたことは考えられなくはない。

○防鹿柵設置に関して

ハツとする新提案

続いて、出席者から高山植物保護のための防鹿柵設置に関してハツとする新提案があった。防鹿柵は通常地上に立てるものであるが、格子状の柵を寝かして置いたらどうだろうという提案である。通常、柵は2メートルほどの高さで高山植物の繁茂するエリアをグルリと巻く。柵の背丈が低いと鹿に飛び越えられるので一定の高さにする必要はある。しかし高さが景観を損ねるのである。

高い背の柵は遠方からでも見えて登山者には興ざめである。大自然のお花畑が人工工作物に囲まれているのは不自然でもある。また、

設置の際には基礎工事も必要だ。風で倒れないよう支柱も立てねばならない。手間もかかるし費用もかかる。基礎工事は高山植物が繁茂する地表土を傷つけよう。そして、仙丈ヶ岳でやっているように、積雪期には解体する必要がある、手間と経費が上乘せされる。それなら、その格子状の柵を立てないで地上に伏したらどうだろうかという提案なのだ。

ヒントは市中の道路側溝に掛けられたグレンゲだという。提案者の発想は、犬の散歩中、グレンゲにさしかかると犬は決して上に乗らないのにヒントを得たという。犬がグレンゲを嫌うのは愛犬家には周知のことらしい。また、猫餌をグレンゲの上に置いて猫は恐れて上には乗らない。これは私も試した。なぜか。それは、動物は格子を踏み抜くのを恐れるからだだろう。四本脚が全て格子にはまれば脱出不能で万事窮す、1本、2本なら骨折の恐れがある。避けるのは動物の本能であろう。試していないが、例えそのグレンゲ格子の穴が小さくて踏み抜く恐れはなくても乗らないであろう。

つまり、提案はこのグレンゲに模した格子柵を、お花畑の周り



にただ伏せたらどうだろうかとい
うのである。柵の幅とか地上から
何センチほどの高さがいいのかは
実験で確かめる必要がある。低
すぎれば雑草に埋もれるし、高
すぎれば潜りぬけられる。伏せるな
ら立てるのと違って基礎工事も不
要で、冬季に解体する必要もな
らう。目立ちもしない。

更に提案者はグレチングの材料
に竹利用を提案した。竹を4割り
とか8割りして編んで作るの
は軽い。高山への運び上げ経費や
設置エネルギーは格段に低く済む。
また、竹は自然物なので放置す
れば腐敗して土に還る。プラ
スチック材や鉄材ならそうはい
かない。竹素材は環境対策面
でも優れているのである。

竹は手に入りやすい。特に里
では放置竹林が問題になって
いるほどだ。提案は、その竹
の有効利用につなげようとする
試みでもあるのだという。なる
ほどと思える提案と考
えた。どこかの自治体で試
す価値があろう。

1日目は、このような議論で
盛り上がった有意義なシン
ポジウムであった。

2日目は、転付峠と千枚岳登山

の2班による行動を計画して
いたが、結局は千枚岳班だけ
となった。白簾会長も参加
された。しかし、残念ながら
登山日和とは言えず、曇天
で山頂はガスに覆われるなど
視界が悪く、期待していた
ほどの写真は撮れずじまい
だった。また、登山道両側の
紅葉は見頃を迎える時期
であったものの、こちらも今
年の天候のため色の乗りは
悪く、えなかつた。

ここで話は飛ぶが、思いついた
ことを提案したい。10月に
札幌市街地各地で熊が出没
して騒ぎになったことは記
憶に新しい。旭川では走行
中の車が熊と遭遇し、車を
止めたら熊に車を壊された
という。どうして北海道で
こんなに熊が出没したのか
。それは今年の北海道は
ブナやミズナラの実が不作
で越冬を控えた熊たちの食
糧が不足し



裸山ネット

たためらしい。実際、捕獲
した熊の胃には食べ物が入
っていない。たという。

幸い本州では人里に出没
した熊と人間とのミスマ
ッチの報告はさほど多く
はないが、しかしキノコ
採りに行ったお年寄りが
噛みつかれた、庭先の柿
の実を狙った熊を追い返
そうとした人が逆襲され
た、などの被害が報告さ
れている。

一般的に、熊が人里に出
没する背景は奥山の広葉
樹が伐られて杉ヒノキに
植え替えられ、熊が餌と
する木の実がなくなった
一方で、里山の村では高
齢化や過疎化が進み、人
の影が薄くなった。田畑
の手入れも行き届かない
。作物全てを回収しない
。ガホチャや里芋も残り
柿や梨の実も取らない
。熊にとっては都合が良
いのだ。だから里



食害状況

に出没する。しかし、熊
は人間に危害を加えるこ
とがあるので怖い。

そこで、岡山県美作市
では、こうした熊出没を
テーマに、今年12月16
日に美作市内で全国熊サ
ミットを開くことを決
めたという。報道によ
ると各地から問い合わせ
があるという。サミットの
目的は、熊の生態学、森
林学、村づくり地域づく
りの観点から熊からの人
的被害を防止し、熊と人
との共生の道を探るため
という。参加者は行政や
研究者及び一般人を想
定しているという。各地
から集まれば美作市の
活性化になる。

○全国鹿サミット開催を提案

これを読んで、思いついた
のであるが、我が高山植
物保護協会においても、
全国鹿サミットを開い
たらどうだろうかと思
案したい。協会のPRにも
なる。これまでの3回の
100人会議では主として
鹿から高山植物を守る
ための方策検討であ
ったが、サミットでは
幅を広げ、人や地域が
鹿とどう折り合いをつ
けたら共生できるかを
主テーマにしたらと思
うのである。100人
会議で得た知見を元
にして更に議論を発
展させるのである。
対象者としては登山
や自然保護に



興味のある人だけでなく、農作物被害に悩む農家や行政関係者に加え、農協関係者も加えたらと思う。

鹿は高山植物や農作物を食害するが、彼らだつて生きるためには食わねばならない。植林した杉ヒノキの苗木のつまみ食いや樹皮を剥がして枯死させるのは大きな問題であるが、人間側にも責任がないとは言えない。落葉広葉樹林を杉ヒノキの植林地に変えることは彼らの食を奪うことにつながる。雑木林では林床に太陽光が注ぎ下草をはじめ灌木類が繁茂し、それが鹿などの餌になるが、植林地は日が射さず林床に下草は生えない。

また、最近、鹿が高山に進出し高山植物を食害して我々を悩ますわけであるが、なぜ高山に進出するようになったのか、その理由をしつかり押さえる必要もあろう。里の鹿が増えずに里の餌が不足するので高山に登るようになったという意見があるが、それが全てだろうか疑問に思うのだ。

当てはまる地域もあろうが、私は地球温暖化に起因しているのではと思う。もともと鹿は雪深い高山には生息しない。積雪が腹につくほどの深さでは鹿は行動できない。これはカモシカと決定的に違

う。カモシカは人間の背丈ほど積もった雪でもラッセル車よろしく掻き分けて動けるが鹿はそれができない。このことは積雪期登山をする者であれば皆知っている事実である。

最近では地球温暖化で降る雪が少なくなっている。里と同じように高山に降る雪も少ない。しかも、野生動物は常に自分たちのテリトリーを守り、かつ機会があれば拡大しようと伺っている。テリトリーを広げればそれだけ自分たちの仲間の個体数を増やすことができるのだ。鹿が高山に進出する理由がここにありそうな気がするの自分だけだろうか。

高山植物を鹿の食害から守るには、手っ取り早くは食べられないよう生育する地域を柵で囲む、鹿の頭数を間引くのがよろしかろう。しかし、根本的な対策は地球温暖化の進展を阻止することだろうと思えるのだ。とは言えこれは私の考えであつて実は違うのかもしれない。分析に誤りがあれば対策も変わつてこよう。幅広い議論をすれば違った方向や対策が見えて来るに違いない。

来年は、会による「全国鹿サミット」開催を提案したい。

伊那市のニホンジカに対する取組み

伊那市役所農林部耕地林務課長 富山 裕一
南アルプス食害対策協議会事務局長



2009.7.9 雨の中柵設置



2011.7.8 柵内のミヤマキンポウゲ等



2011.7.8 再設置された柵

伊那市におけるニホンジカによる食害は、農地から高山帯にまで及び、この対策は市政の最重要課題の一つになっています。

農作物被害への対策としては、捕獲の推進、防護柵の設置、緩衝帯整備(里山整備)等に取り組んでいます。南アルプスにおける対策としては、林野庁・長野県・信州大学・関係市町村等と南アルプス食害対策協議会を組織し、被害の著しい仙丈ヶ岳の「馬の背」において平成20年度から防鹿柵の設置を始め、本年度までに計7箇所(面積0.47ha、延長948m)の保護を行いました。この一帯では環境省も6箇所の防鹿柵設置を行っています。柵設置にあたっては多くのボランティアの皆さんにご参加いただき、時には登山道が川になるほどの土砂降りの雨の中で作業をしていただきました。その甲斐があり、柵内ではミヤマキンポウゲ、シナノキンバイ等が急速に復活してきています。また、今年度からは南ア協議会として猟友会の力を借り、標高2,000メートル付近での捕獲への取り組みも始めました。今後も各対策に継続的に取り組みます。



南アルプスにおける植生復元活動（第十二報）

静岡支部 鶴飼一博

第9報でも、高山植物群落の復元や回復の難しさをお話ししましたが、逆に継続的に活動していると、時には、高山植物が微笑んでくれ、難しさの中にもやりがいを感じる瞬間があります。今回は、そんな話を少しさせていただきます。

1 聖平の

ニッコウキスゲの開花

平成14年に防鹿柵を設置したところ、平成18年に柵内でニッコウキスゲが数株開花しました。その後、わずかではありますが、開花個体数も微増傾向にあり、柵の修繕にもやりがいを感じています。



写真1: 聖平に設置された防鹿柵内の様子 (平成23年7月)



写真2: 聖平に設置された防鹿柵内のニッコウキスゲ (平成23年7月)

今年は、ただ単純に開花したというだけでなく、1株当たりの花数も増えていたため、数日間にわたって花を楽しむことができました（写真1、2）。

シカの影響を排除すれば、ニッコウキスゲの株が太り、大きな株になることは想像できます。毎年の観察により、それが確認できま



写真3: 聖平に設置された個体保護ネット

したので、自分の子どものようにかわいく感じます。

さて、今年は聖平で違う現象が見られました。それは、個体保護用のネットの中や、平成19年に設置した柵内の開花です。昨年見た限りでは、まだまだ株が小さく、今年開花するとは思いませんでした。今年は開花しないと思っただけに、嬉しい出来事となりました。

さて、個体保護用のネットですが、防鹿柵のような頑丈で面的なものではなく、数株を保護する目的にナイロン製のネットをかぶせたもので、高さは1m未満のピラミッド型です（写真3）。例年、ネット



写真4: 聖平に設置された個体保護ネットから頭をだしたニッコウキスゲ

から花茎がでたところを、シカに食べられていました。今年は、なぜか、ネットから出た花茎が食べられず、つぼみをつけ、開花したのです。ピラミッド型の個体保護ネットの有効性が確認できただけでなく、ネットからとびでたニッコウキスゲが開花したことに驚きました（写真4）。

今年、ニッコウキスゲの開花個体数が増えた理由は、二つあると考えています。一つは、ニッコウキスゲにとって良い気候環境にあったのではないかと。これについては、今後、気候と開花数等をモニタリングしていく中で、関係性が見えてくるかも知れません。



ん。今後の調査結果が楽しみです。

もう一つは、シカの影響が例年よりも小さかったのではないかと
いうことです。実は、シカの生態
を把握するために、静岡県がシカ
を数頭捕獲しました。そのおかげ
かどうかはわかりませんが、例年
よりも7月の聖平に生息するシカ
の数が少なく感じました。あくま
で、推測の域ですが、今年のシカ
の生息数程度であれば、高山植物
への影響が小さく、食べられる個
体もあれば、開花まで至る個体も
あるということではないでしょう
か。今年の生息密度と同じか低け
れば、植物群落がそれなりの形で
成立しそうです。共存できる可能
性も見えてきます。

2 伏工の効果

伏工は、山の崩壊地やハゲ山の
緑化方法の一つで、森林土木工事
の分野で技術的に発達してきました。
最初は、裸地に天然の芝のカー
ペットを並べたりしていましたが、
次第にナイロンなどを利用した二

次製品が作られるようになり、崩
壊地の表土流出やリルの形成防止
として活躍しました。種子や肥料
をそれらの素材に添付して、より
緑化速度を速める工夫もしてきま
した。

高山帯や亜高山帯、湿地帯にお
いて、裸地化防止や植物群落の復
元を計画しているところでも、こ
れらの技術が導入されました。し
ながら、そのまま導入したとこ
ろは、外来種問題が発生。また、最
初から種子や肥料を導入しなかつ
たところは、緑化スピードが遅く、
植物群落復元の難しさを痛感させ
られています。

南アルプスの聖平や塩見岳にお
いて、高温滅菌処理したヤシ繊維
製のネットで地表面を被覆してい
ます。なかなか緑化は進みません。
凍上が一番の天敵ではないかと
考え、できる限り地表面が凍上しな
い、つまり0度を下まわらないよ
うにする工夫が必要と考えました。
それには、まず地温の変化を知る
必要があり調査しました。結果は、
ネットを二重にすることで0度を
下回る日がほとんどなくなり、保
温効果があることを確認しました。
そのため、現在、活動資金に余裕
があれば二重にしています。

二重にしたところは、緑化が早
いかというと、そうでもありませ
ん。観察を続けていると、ネット
に少し土砂がかぶっている方が、
復元が早そうだと思います。そ
こで、昨年、現地でネットに土砂
を少しかぶせた実験区域を設けま
した。結果は、変わりありません
でした。勿論、1年程度の実験で
結果を論じるのは早急すぎますが、
高山帯や亜高山帯での緑化がこれ
ほどまでに難しいものだと思つて
いなかっただけに、落ち込むこと
もしばしばです。

聖平よりも、標高が高く、もつ
と厳しい環境にあると思われる塩

見岳は、予想に反して、ネットの
間からいろいろな植物が顔をのぞ
かせています(写真5)。ハクサン
イチゲ、イワベンケイ、タテヤマ
キンバイ等。ネットを敷設しても、
緑化は無理だろう。せめて土砂流
出は防ぎたいと考えていた塩見岳
東峰山頂直下のお花畑が、また高
山植物に覆われる日がくるのでは
ないかと期待させられます。

聖平の緑化が進まないところは、
表土が数十cmも流出しており、そ
して、粒形がそろった平滑な斜面
のため、変化に乏しい場所です。
一方、塩見岳は、礫がごろごろし
ており、変化に富んでいます。今回、

裸地になつてすぐ対策を
始めたため、礫の間に細
粒分や根茎が残っていた
ためではないかと考えて
います。

単純には、裸地化が始
まつてからの時間の長さ
と復元速度は反比例する
のだと思いますが、その
他の要因に気づかせてく
れる二つの事例です。今
後、観察を続け、自然
が発するメッセージを
キャッチしていきたいと
思います。



写真5：塩見岳山頂直下のヤシネットの敷設作業



関西支部 活動報告

(支部長 小谷 哲朗)

環境学習会を実施

関西支部法人部会では、環境問題に対する意識を高め日常の生活に生かすために、毎年秋に環境学習会を開催してきました。今年は吹田市資源リサイクルセンターの見学をメインとし、万博記念公園の散策とサントリー山崎蒸溜所の見学を組み合わせて計画し、10月22日(土曜日)、参加者は13名と少しさびしかったのですが、大雨になるという予報が出ていた中、雨の影響を受けることもなく実施することができました。



破碎工場の見学



選別作業の見学

吹きガラスの工房

吹田市資源リサイクルセンターは、ゴミに対する意識の向上、リサイクル活動を推進する施設で、ゴミの処理と資源化をはかるシステムや「くるくるプラザ」という愛称のリサイクルセンターを見学しました。

まず破碎選別工場のごみの処理、破碎・選別の工程を見学、参加者は作業の様子をカメラに収め、熱心に説明を聞き興味深い様子でした。「くるくるプラザ」と

いう愛称のリサイクルセンターでは、市民ボランティアによって運営されている市民工房のうち、自転車の再生や洋服などのリフォーム、資源ごみとして収集したビンをとかして利用する吹きガラス、再生された木工品など、活動の一端を紹介・説明していただき、資源の再利用についての知見を得る

ことができました。昼食の後、万博記念公園内を散策したり、見頃のコスモスの花を觀賞したり、また国立民族学博物館の見学など、おもいおもいの時間を過ごしました。その後、山崎にあるサントリーの蒸溜所を訪ね、和気あいあいのうちに環境学習会を終えることができました。



自転車のリサイクル



吹きガラスの工房



コスモス・フェスティバル



ウイスキーの試飲コーナー



昭和大学北岳診療部支部活動報告

(支部長 木内 祐二)

平成22年度より昭和大学北岳診療部は日本高山植物保護協会の北岳支部として高山植物保護活動を開始した。北岳診療部は昨年、創設30年を迎えた医学部学生と看護専門学校との学生による部活動組織であり、約50名の学生部員が南アルプスの山頂下にある北岳山荘に隣接する北岳診療所で、主に夏休み期間に、医師の指導のもとで登山者に対する診療活動を行っている。本年度からは白根御池小屋でも活動を開始した。医学部学生を

中心とする部活動であり、活動期間や活動範囲も限られたものではないが、高山植物の宝庫であり積極的な保護活動が望まれる南アルプス北岳周辺の貴重な高山植物保護のために、出来る範囲内で活動を行った。

本年度は、以下に示すように夏季の診療活動にともなう北岳山荘付近での保護活動とともに、大学内外での広報、啓蒙活動を開始した。



図1 診療所内のポスター



図2 北岳山荘付近でのパトロールとゴミ拾い

平成23年活動内容

1) 7月14日～8月19日

北岳診療所夏山活動期間にて以下の高山植物保護活動を実施

① 広河原山荘、白根御池小屋、北岳山の小屋、北岳山荘、北岳診療所に高山植物保護を訴える手書きポスターを貼付

北岳周辺の山荘に協力していただき、ポスター(図1)を貼付し、登山客に高山植物の稀少さを知ってもらおうと呼びかけをおこなった。

② 北岳山荘を中心に高山植物保護パトロール

診療期間中、好天時はほぼ連日、医療パトロールをするとともに「お花畑」を巡回し、高山植物の盗掘や踏み荒れがないか、パトロールした(図2)。

③ 高山植物保護協会のロゴマーク



図3: 昭和大学北岳支部のワッペン

の入ったワッペンをつけて保護の訴えかけ
北岳診療所と白根御池小屋に置いてある救急用ザックに高山植物保護協会のロゴマークの入った北岳支部オリジナルワッペンをつけて保護活動の実践を訴えかけた(図3)。

④ 北岳登山道のゴミ拾い

診療部関係者の登山、パトロール中などに、ゴミ拾いを励行し、北岳の環境美化を実践した(図2)。

2) 8月12日

全日本医科学生オーケストラフェスティバルの演奏会プログラムに広告を載せ、啓蒙を行った。

3) 昭和大学高山植物保護サークルの設立

昭和大学の公認サークルとして、9月に昭和大学高山植物保護サークルを設立した。構成員として、小口勝司学長を含む大学内の医師、薬剤師が多数参加している。今後、実践的な、高山植物の保護活動、啓蒙活動を実施する予定である。



伊那谷支部 活動報告

(支部長 片桐 勝彦)

●中央アルプスの環境保全 合同パトロールに参加

8月2日、中央アルプスを管理している南信森林管理署、上伊那地方事務所の主催で、中央アルプスの環境保全を目的とした合同パトロールがあり支部からも参加した。



合同パトロール参加 (2011年8月2日)

千畳敷のほか、木曾駒ヶ岳、伊那前岳、極楽平、松尾岳の稜線で、登山道整備、保護ロープ補修等環境保全、高山植物保護等の活動を行った。

参加者は、主催者の南信森林管理署、地方事務所の担当官のほか、大勢の山岳関係者であった。

●駒ヶ根市駒ヶ根高原で ゴミ持ち帰り キャンペーン実施

夏山シーズン最盛期を迎え、登山者、観光客で賑わう駒ヶ根高原の台バスセンターで、8月7日、ゴミ持ち帰りキャンペーンを実施し、中央アルプスの高山植物保護を訴えた。

支部会員が5名参加し、本部作成のゴミ袋、高山植物保護のティッシュペーパー、支部作成の高山植物保護のチラシを夫々



駒ヶ根高原の台バスセンターでキャンペーン (2011年8月7日)

300枚入山者に配布した。支部会員は素晴らしい山岳景観や高山植物の話をしなが資料を手渡したが、入山者は笑顔で楽しみにしている様子だった。

●中央アルプス駒ヶ岳神社 秋の例大祭開かれる

11月8日、中央アルプス千畳敷にある信州駒ヶ岳神社で秋の例大祭が開かれた。

南信森林管理署、地方事務所

など関係諸官庁、山岳ガイド、自然保護団体、観光会社等の関係者約40名が参加、夏山、秋山の無事を感謝し、これからの冬山の安全を祈願し参拝した。
中央アルプスも例年より降雪が遅く、この時点ではまだ雪はなく落葉の風景だったが、間もなく一面の銀世界を迎える。
今年は大天候不順で、千畳敷の鮮やかな紅葉が見られない秋であった。



中央アルプス駒ヶ岳神社 秋の例大祭 (2011年11月8日)



平成23年度高山植物観察山行を実施

去る7月31日～8月1日の両日、木曾御嶽山（3067m）において、19名が参加し、平成23年度の観察山行が実施されました。以下は参加者からの報告です。



平成23年度 JAFPA 観察山行 木曾御嶽山
2011年7月31日～8月1日 於：御嶽山山頂

していたルートが通行止となり、熊崎会員の奨めで花の多いこのルートになったとのことでした。途中、珍しいコフタバランなどを見ながら登り、摩利支天が見えて来る頃には雨も上り、岩礫の中に淡紅色のコマクサが咲いていました。

間もなく五の池小屋に到着。濡れた物を乾燥室に干し、新築された部屋に入る。夕食時、小屋のご主人からコマクサの保護活動について話を聞きました。

昔、コマクサは普通の花で沢山咲いていたが、御嶽百草丸の原料として採取され全滅状態となった。それを一人の人が生涯をかけて復活させたが、その後、盗掘や踏み荒らされて全滅しかけています。

そこで小屋のご主人達が保護に

乗り出し、行政の協力も得て、緑のロープを張って、今の状態まで回復したとの事でした。

その夜は、外は満天の星空、内では酒宴が続く、塩沢さんから高山植物保護の難しさ、特に鹿の食害の防止のための行政との連携の大切さについて話を聞きました。

8月1日は早目の朝食をとり、四の池、継子岳を見て、遠く富士山、乗鞍岳を眺めながら二の池を目指した。

二の池本館の前を通り、覚明堂からの合流点に荷物をデポして頂上へ登る。剣ヶ峰の御嶽神社奥宮に参拝後記念撮影して、下山。

途中の無縁墓地に濃い碧空色のイワギキョウが墓の主をいたわる様に一面に咲いていました。膝の悪い私は下りが全くダメで、宮田さんに励まされながら、やっとロープウェイ飯森高原駅に辿り着きました。斜面にはコバノトンボソウとモーセンゴケが祝福してくれました。

鍛えていないと
いけない事を痛感！

山梨県西桂町 池田真人

木曾御嶽山を下山して翌日、両

足のふくらはぎが筋肉痛で大変でした。仕事ばかりでなく、日頃からもう少し鍛えていないといけない事を痛感いたしました。

1日目は雷雨の中の登りでしたがゴゼンタチバナやキソチドリ、コフタバランを教えていただきました。

2日目は好天に恵まれ、三の池から摩利支天に登り、賽の河原を通り二の池を抜け剣ヶ峰に登りました。三の池も二の池も思っていたよりも大きく美しく心に残りました。登頂後はひたすら下り、前日の雨で足元がすべり神経を使い、尻餅をつきながらも無事に下山する事が出来ました。ガイドとして下さった熊崎さん、スタッフの皆様有難う御座いました。

川合さんを始め塩沢さん、皆様の気力と体力、色々な事を教えて

下さる姿勢にただただ感服致しました。

またの山行を楽しみにしております。



コマクサ

木曾御嶽山観察山行
千葉市 村上隆

前日本曾福島に入り街を散策しました。

当日、皆様と合流して、マイクロパスで登山口の濁河温泉へ行き、雨の中を出発しました。予定



ゴミ持ち帰りキャンペーン実施



「役の行者」は吉野の金峰山（きんぷせん）に蔵王権現を祀り修験道を広めたといわれています。吉野と同じような大岩のある（五丈岩）山に蔵王権現を祀った奥秩父の盟主金峰山（きんぷさん）は甲斐国志では「玉壘」と呼ばれ、この麓を「瑞壘」（神社の周囲をめぐらす垣根の意味）と呼んでいたようですが、いつの間にかお隣の奇岩林立するやまを瑞牆山と呼ぶようになったといわれています。



このような瑞牆山は古くから金峰山の信仰に結びついて修験者の修行の場として登られ、「カンマンボロ」の梵字の言い伝えも残っています。また近年は、深田久弥の『日本百名山』に選定され、アプローチの短縮もあって、たくさんの登山者が訪れるようになりました。そこで、日本高山植物保護協会では、本年の高山植物保護とゴミの持ち帰りキャンペーンを紅葉が盛りを迎えた10月29日（土）に瑞牆山で実施しました。

当日の朝5時に甲斐市役所に集合した会員及び事務局員が、2台の車に分乗して瑞牆山荘の駐車場に到着したのが6時過ぎではあったが、既に沢山の車が駐車していた。

登山口にキャンペーン用の幕を枝にかけ、用意したポケットティッシュを沢山の登山者に配布しながら高山植物の保護と、ゴミ持ち帰りの協力を呼びかけた。協会発足以来繰り返し行ってきた

キャンペーンの効果もあり、当時とは比べ物にならないほど自然保護に対する関心が高まり、大部分の登山者が深い理解を示してくれ「ご苦労さまです」の言葉が返ってきた。

雲ひとつなく紺碧の空に瑞牆山のヤスリ岩が朝日で紅色に光り輝き、黄金色に輝く落葉松の梢の間から美しい姿を見せてくれた。そうしている間にも続々と県内、県外ナンバーの車が登ってきて、駐車場はみるみる一杯になり、路上駐車を余儀なくされる車も多く新

たに駐車場の確保を望む声もあった。

やまガール、やまボーイ、家族連れ、シルバー年代等様々な登山者が、カラフルになった登山服を身に纏い元気で山に登っていく。用意した300個のポケットティッシュは1時間半ほどで消化してしまった。

その後見事な紅葉の中、盛りを過ぎて枯れ始めた植物や、針広様々な樹木を観察し、「富士見平」でキャンペーンを終了した。

事務局

会員からの便り

「南アルプスお花畑シカ食害で激減」の静岡新聞（特集）の送付

三島市 三神 徹

常日頃「会報」等で高山植物・野草・樹木の観察や自然保護のあり方などのご教授をいただき感謝しております。

今回は、地元（静岡支部）の新聞に表記の記事が掲載されましたので、何かのお役にたてばと思いい送付いたしました。



日本各地の高山植物
No.6
中部山岳地方2



●クルマユリ(ユリ) 7~8月
葉が1~3段輪生します。花は反り返って丸く見え、この花色はお花畑が目立ちます。



●クモマズナ(アブラナ) 6~7月
別名はタカネズナ。本州の中部地方の高山帯から高山帯の岩場に生える。



●コマウスユキソウ(キク) 7~8月
ウスユキソウの仲間です。最も小型で、ルプス木曾駒ヶ岳の特産種です。中央ア



●クロユリ(ユリ) 6~8月
花の色と葉のつき方ですぐわかります。恋の花として有名ですが、異臭があります。高さ10~30cm

平成 24 年 1 月 1 日発行
特定非営利活動法人
日本高山植物保護協会事務局
〒400-0027
山梨県甲府市富士見 1-3-28
TEL・FAX 055-251-6180
HP アドレス
<http://www.jafpa.gr.jp>
E-mail
info@jafpa.gr.jp
掲示板 ID
jafpamem
パスワード
jfp2001

平成 23 年度高山植物フォトコンテスト作品募集

- ・応募作品の裏面に、花の名前、撮影場所と年月日、氏名、連絡先、会員番号を記載してください。
- ・作品の大きさ：四つ切 ・募集締切：平成 24 年 3 月末日
- ・表彰式：通常総会の当日
- ・審査員：白旗史朗氏 (NPO 法人 日本高山植物保護協会会長)
- ・入賞者には盾と賞金を授与するとともに、情報紙とホームページで紹介します。
- ・応募作品は返却できませんので、ご了承ください。

●高山植物 一口メモ ジョウロウホトトギス ゆり科

ジョウロウホトトギスは、日本固有で、土佐横倉山で発見された時、花が上品で、しかも美しいので、上臈(宮中に仕える貴婦人)の美しさにたとえて、命名されたという。高知県と宮崎県に稀産する。他に二種一変種があって、キイジョウロウホトトギス(紀伊半島)。スルガジョウロウホトトギス(静岡県)、その変種がサガミジョウロウホトトギスという。

昨年 9 月 15 日、毛無山の溪谷にスルガジョウロウホトトギスを尋ねた。山路をはずれて、小さい流れを三回ほど徒渉すると、目の前の岸壁に鮮黄色の美しい花が下垂していた。それは、まだ宮中に上がる前の山家の美しい少女を偲ばせる風情だった。本家のジョウロウホトトギスを是非みてみたいが、何より、絶滅危惧種が、絶滅種にならないようにと祈るばかりである。

(文と写真 大内京子)

